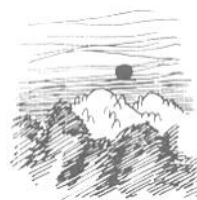


# 哲学カフェ de ぎふ

せんしゅう

## 千秋まちかど文庫 通信



運営委員会発行 (記録:安藤彰浩、編集:吉田千秋・中川健史) (主宰)吉田千秋 090-7917-9602

### 《子どもの虐待が増えているのはどうしてか?》

「実は、テーマを設定した後に知ったのですが、11月は児童虐待防止月間でした。その期間中に、この問題を意見交換できたことをうれしく思います。少しでも虐待を減らす方向に向けて歩みたいものです。」

#### 問題提起・吉田千秋

\*今日は哲学カフェの前運営委員長阿部さんの提案を受けて、子どもの虐待の問題を取り上げます。子どもの虐待が社会問題化して久しいですが、増加傾向が収まる気配は窺えません。危機感が少し欠けていて、これまで政治の取り組みが充分ではありませんでした。東京目黒区の死亡事件など悲惨な出来事が続いて、今年6月に虐待防止を目指して児童虐待防止法と児童福祉法が改正されました。阿部さんは行政による児童相談所充実の取り組みの重要性を認めた上で、子どもの虐待を本当に無くすためには、本来あってはならない事がどうして家庭で起きてしまうのかを考えるべきではないかと指摘しています。

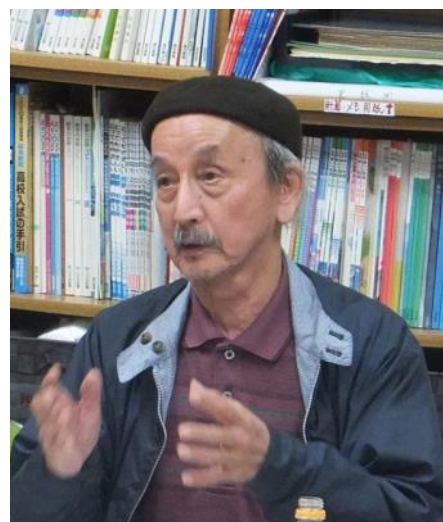
\*近年、出生前診断が可能になって、その結果に応じて、親が自分たちの都合で産むか産まないかを決める、言わば、子どもの「生死権」を握ることになっていますが、これなどは、親が「子どもは天の授かり物」、掛け替えの無い「命」ではなく、子どもを自分の「付属物」と考える意識の反映ではないのか。自分中心主義で、子育てを負担としか考えられない親がいるのは確かであるが、個人の生き方に原因を求めただけでは問題の根っ子を捉えることはできません。

\*虐待を行う親で、就職氷河期の世代に属している人たちがいます。この世代の人たちは正規の仕事に就くことができないで、生きることの辛さ、世間の冷たさを人一倍味わってきた人たちです。最近、兵庫県でこの世代の人たちを対象にした採用募集を行った際、3名の募集に千数百人の応募があったという報

道がありました。激しい受験競争など、過酷な競争原理に貫かれた不寛容な社会の現実が子どもの虐待の背景にあると言えないでしょうか。

\*昨年度の児童虐待の相談件数は十六万件近くで、事件として摘発を受けたものが1300件ほどに上ります。被害にあった子どもの数は1394人で、死亡数は減少して36名となりましたが、摘発件数そのものは242件増加しています。昨年3月東京都目黒区で船戸結愛ちゃんが死亡するなど悲惨な事件が続いて、虐待防止の法改正が行われました。今年に入って、また千葉県野田市の心愛ちゃんと札幌市の詩梨ちゃんが衰弱死する事件も発生しています。

\*警察が児童相談所に通告した虐待の疑われるケース8万件余りの内訳は、「心理的虐待」が7割以上を占めて、その中の6割は、子どもの前で夫婦間の暴力行為「面前DV」でした。摘発された虐待事件では1380件の内、8割弱が身体的虐待で、約1割6分が性的虐待でした。身体的虐待では実父母によるものが7



割以上を占め、性的虐待では養父、継父によるものが多数を占めています。この外虐待には、直接的な暴力を伴わない場合でも、子どもを顧みないで、正常な生育を脅かす育児放棄、ネグレクトも含まれます。

\*さて、今年成立した虐待防止法の主だった改正点は、体罰禁止を明文化すること及び児童相談所の人員を強化して、家族の相談相手となる者と児童の安全確保のために家族生活に直接介入し保護する者を分離すること、さらに、関連機関の連絡を円滑にする共同を推進することにあります。また夫婦間の暴力が子どもの虐待の素地を作っているという認識からDVIに対する対応も考慮されます。

\*しかしこれで十分なのかという疑問もあります。体罰禁止は当たり前のことなのですが、民法で親に認められた懲戒権は、今回の法改正では検討課題となりましたが、廃止するには至りませんでした。懲戒権を認めると、躰けのための肉体的な制裁が暴力と区別されて、事実上体罰が正当化される恐れがあります。こうした事情を考慮してドイツやフランスは60年程

前に親の懲戒権そのものを廃止する改革を行っています。

- \*従来の考えに囚われないで、また問題を親子関係に限定しないで、色々なレベルで捉える必要があります。親の責任が問われることは言うまでもありません。児童相談所がもっと機能する様に人員を増強し、制度を改善させることも必要です。もっと視野を広げて、子育て世代の親の置かれている社会状況について考えることも不可欠です。多くの人が息苦しい閉塞に苦しみながら厳しい競争に駆り立てられています。社会全体で価値認識の一元化が進んで、多様性の承認が得られない状況にあります。
- \*核家族化が進んで、若い親の世代が、繋がりの薄れた地域社会で孤立することも少なくありません。経済的にも不安定で、将来の見通しも暗い、互いに助け合うことの稀になった不寛容な社会環境で生きることを余儀なくされています。このような不寛容と孤独という状況に置かれた若い親たちが、不満のはけ口を子どもに向けている様にも思えますが、どうでしょうか。

## 意見交流



- \* 20年程前、小学生だった時、クラスで悪さをする常習犯の男子が先生を怒らせて、叩かれたことが強く印象に残っている。40代の女性の先生が、「本当はいけませんが、叩くよ」と前置きして、男の子を二、三回叩いた。その先生は叩くことはいけないう認識は持っていた。
- \* 殴ったことはないが、子どもに腹が立って、お仕置きに家の外に出したことがある。脅かして、何がいけない行為か分からせようとする試みだが、言葉で分からせる能力がないことの証と言える対応だった。哲

学者と青年の対話という形を取っている「嫌われる勇氣」という本に感銘を受けた。人間関係を縦の関係と考えるか、横の関係と考えるかで対応が違っている。虐待は縦の関係と考えることから生まれる。

- \* 義理の父である母親の再婚相手が子どもを虐待する事件が幾つかあった。母親はしばしば再婚相手に対して従属的な関係にあって、心ならずも虐待の共犯者になってしまう。これは子どもを抱える若い女性が経済的に自立できないことから生まれる悲劇である。離婚後、養育費を負担する父親の割合は25%程度らしい。女性が独立して生活出来ればこうした事件も防げるだろう。
- \* 今日のテーマから逸れるが、母子家庭の経済問題は法制度の不備から生まれる。日本では結婚離婚は当事者の届け出だけで決まる。極めて簡単で、紙にハンコを押して役所に出した瞬間から、夫婦は赤の他人となる。欧米では結婚も、離婚も法的に拘束力のある契約によって二人の人間が取り決めをすることである。結婚はそれほどハードルが高い訳ではないが、法的な取り決めとしての離婚はハードルが高い。離婚は財産分与とか、子どもの養育及び養育

費の分担とかを弁護士を介して決めて、裁判所が承認して初めて成立する。双方が離婚に合意しても、裁判所の裁定には数年の時間を要する。男性側が離婚後、子どもの養育の責任を放棄することは認められないし、養育費の負担をサボタージュすることは許されない。女性が泣き寝入りすることはほとんどあり得ない。

- \* 元同僚の先生でフィリピン人の女性と結婚している者がいる。彼女は子どもに鞭で体罰を与えて、周りの者を驚かせた。同僚の母親が説得して止めさせようとした。同僚の妻は親から同じ様に罰を受けていた。過去の体罰の経験は繰り返される傾向がはっきりしている。現場での経験から言えることだが、被害者が加害者となって虐待の経験は繰り返される。さらに困ったことは、教育的な懲罰のつもりが繰り返されて、その内に罰の物理的な激しさがエスカレートしていく。
- \* 歴史は国家や民族の間で過去の悲劇が繰り返されることを示している。90年代の前半、ボスニア紛争で、セルビア側が強制収容所を作ったり、対立する他の民族グループを虐殺したりした。第二次大戦中、ナチスドイツと結んだクロアチア人がナチの親衛隊を真似る様に、対立するセルビア人を虐殺した先例がある。過去の克服はどのレベルでも容易ではない。
- \* 虐待を経験した者が後になって虐待する者になりがちである。
- \* 虐待が起きる背景には社会構造の変化がある。戦前、家族形態は複数の世代が同居する大家族であった。子育てでは祖父母の協力が期待できた。共同体で助け合うことも珍しくなかった。戦後、核家族化が進んで、子育てにおいて経験のある祖父母の助けを得ることがなくなった。子育ては苦勞の多いが、経験者の知恵の借りられない若い世代は対応ができなくなっている。
- \* たいていの親は子どもを良い子になって欲しいと思い、大事に育てようとする。出来るだけ良い学校に入って、良い会社に入ることが、不足の無い人生を送るために必要不可欠な条件だと考える。しかし子どもたちは皆同じ様な期待を背負わされて学校に入って来る訳だが、そうしたクラスメイトになじめなくて、学校が面白くないと感じる子どもは少なくない。



親の期待が大き過ぎると学校へ行くことが却ってストレスを増大させる結果となる。何が本当に大事なことなのかしっかり考える必要がある。あからさまに競争に駆り立てる学校教育を見直さなければならない。

- \* 教育の側に傲慢な勘違いがある。それが社会全体の大きなストレスの原因にもなっている。根本に人間の能力を試験で客観的に評価できるという思い違いがある。結局、人間を選別評価することが教育の目的の一部になってしまっている。教育は国家ないし経済に貢献する人材の養成の道具であるべきでない。そのためにも教育の関わる者は自身で、極めて一面的に評価されているに過ぎない学業の結果が絶対的な有効性を持つかのような思い込みをする過ちに気をつけなければならない。学校教育そのものの意義を過大に評価しないようにすべきである。
- \* 昔は周りに相談相手が沢山いた。漫画「巨人の星」の父親星一徹の様なスパルタの親爺が当たり前だった。戦前の日本で体罰は教育の一部と見なされ普通に行われていた。危険が至る所にあって、生活の安全に乏しい時代だった。昔の体罰と今の虐待は質的に違う様に思われる。虐待は安全の時代の弊害の現れである。
- \* 核家族化によって家が他者の出入りの無い密室となった。虐待は外の間人ないし第三者の眼の届かない所で起きる。
- \* 昔は日本の教育において、恩とか忠誠といった封建的な美德を説く儒教道徳が大きな位置を占めていた。親は第一に敬われるべき存在そのものだった。昔が良かったとは思わないが、今、親は苦しい立場にある。親はサラリーマン化して、尊敬に値するののか、権威があるのか分からない存在となった。教育は偏差値万能で、その役割は資本の求める人材作りになった。
- \* 自分の子どもを可愛がるのは全ての動物の本能に

基づいた行為である。これができないということは、よほど追い込まれているってことかもしれない。保守政治は親子関係の問題をモラルの問題として捉えようとする。モラルの乱れを西洋化によって日本の伝統が損なわれた結果と見なして、美しい日本を取り戻せと「日本会議」の様な怪しげな組織を作る。

- \* (昭和20年代の前半生まれ)子ども時代、父親に厳しくやられた。親を怒らせて、棒で叩かれたり、暗い部屋に閉じ込められたりした。或る程度自分で納得していたのか、恨みに思ったりしたことはない。今、体罰はいけないことになっているが、学校は校則とか、生徒の心得とかいって、一方的に決まりを押し付ける。なぜ、その規則が大切なのか考えさせることはしない。様々な場面で、周りの評価を気にして、生きて行かなければならない今、先生も、親も大変である。人間は失敗しながら成長する。上手くやれないからと落ち込む必要はない。
- \* 二人の子どもを育てた。始めは子育てについて何も分からなかった。人間は子どもが生まれて、悪戦苦闘を繰り返して、子育てをしながら一人前の親になる。
- \* 自分は以前力士を目指して相撲部屋にいた。特殊な世界で、叩く蹴るの体罰は日常のことだった。上の人は、後になれば感謝するとか、大人になれば分かると言う。体罰は効果的であることもある。それ自体が悪い事とは思わない。一般化できないが、時と場合によって、教育的手段であり得るのではないか。
- \* 体罰は脳の発達に悪い影響を与えるという心理学者もいる。
- \* 時代が変わった。柿の木に縛られたり、物置に閉じ込められたことがある。トラウマとかにはなっていない。昔が良い時代だったとは思わない。戦後社会は民主化して個人を重んじるリベラルな教育が行われ

るようになっていった。しかし今の学校は「礼節を重んじる」とか伝統的な徳目を書き出して教室の壁に張ったりして、また子どもを枠にはめようとしている。

- \* 今の学校は非常勤が増えて、先生のサラリーマン化が進んでいる。決められた仕事を片付ければ、それで終わりと考える者が多くなった。
- \* 長良地区の小学校は研究校に指定されていて、他県の学校関係者が見学に訪れる。生徒が型にはめられていて元気がないようにも見える。
- \* 価値は時代によって変わる。糞便は肥やしとして使われ売り物にもなった。今は、人目に付かない場所に隠す必要のあるただの汚物でしかない。自分の価値を子どもに押し付けずに注意しなければならない。親は子どもを守ることを考えればよい。
- \* 個人的に体罰の記憶はない。親は子どもに対して責任を負うが、殺生与奪の権利を持っている訳ではない。子どもが自身の自然な向上心と共に生きていける社会にしていく必要がある。子どもの成績の良さで親が評価されるなど考えることはおかしい。
- \* 現実はその反対で、親の社会的な境遇が子どもの成績を左右する。子どもの出来はしばしば、親に子どもをお金の掛かる実績のある塾へ通わせる経済的余裕があるかどうかで決まる。
- \* 未熟児の子育てを保育所で教えられて親らしくなった。一人ではどうにもならないことがある。保育所の数が減少するなど幼児教育の劣化が心配である。
- \* 人間は子育てを通じて親として成長することができる。子育ての公的な環境整備は重要だが、親になる者は子どもと共に自分が成長することを忘れてはならない。

## 意見交流の最後に・吉田千秋

\*今NHKの朝ドラで、信楽焼の初の絵付け師になる女性を主人公にしたものが放送されています。主人公のお父ちゃんは父親失格のひどい飲んだくれで、直接描写はありませんが、会話で暴行があることを仄めかしています。これは戦後段階の話ですが、ここには子どもに人格は認められておらず、戸主である父親は何でも決める権限を持っていた戦前の家族制度

の延長が描かれています。

\*戦後、個人を中心に置く考えが広まって、こうした家族制度は否定されることになりました。しかし経済復興が一段落して、経済大国への道を進み始める頃になって、社会全体の仕組みが企業活動を最優先する形に組みかえられてきました。個々人の人格向上をめざした「国民教育」も、企業活動＝資本の必要に適

合した教育が求められると共に、企業活動を貫く競争原理が様々な分野に導入されていきます。教育は経済が必要とする人材養成の道具とみなされるようになります。「国民教育」は変質され、一度否定された「国家のための教育」が経済貢献の名前において復権してきたのです。

\*親は誰でも子どもに「一人前」になって欲しいと思っています。しかしこの「一人前」の中味が問題です。基本の考えは、「健康で、ひとり立ちでき、他人を傷つけず、仲良くできる」ということではないでしょうか。その中味が、いつのまにか、良い学校へ行って、良い会社に入るに変わってしまいました。「一人前」に基準が「競争的能力主義」教育の影響で、どんどんつりあげられていったのです。大事なことは、一人ひとりが国家や資本の都合に適合して生きるのではなく、自分で自分の人生を考えて、納得して生きることでしょう。

\*DVの犠牲者はDVの加害者になる可能性が高いと言

います。物理的な恐怖体験は潜在意識に刻み込まれます。この恐怖体験をした者は、自分の思いを他人に伝えることの困難に直面した際、限界状況の手段として、物理的な力に訴えることになりがちです。先ずDVを体験した者に心理療法的な観点から正しい対応が必要です。暴力の連鎖は断ち切れなければなりません。

\*子育てには地域の支え合いが欠かせません。若い親を支える行政の積極的な取り組みを含め、地域の体制作りが必要です。孤立して繋がりの無い状態を克服しなければなりません。この建屋の「仕事工房ポポロ」を主宰している中川さんがシングルマザーの会を発足させ、母子家庭を支援する活動を展開しています。たいへん参考になる試みです。今日は異なる立場から色々な意見を聞くことができ、興味深い場となりました。今後とも虐待やいじめ、セクハラ、パワハラなど、様々な人権無視の問題を議論していきたいと思っています。

## 参加者の感想

○虐待はなぜ起こるのか？ 議論をするには大変重苦しいテーマであった。にもかかわらず、それぞれの観点から自由で闊達な意見や考え方が表明され、有意義であった。虐待の要因を多角的な視点から理解できたように思うが、児童相談所に持ち込まれた虐待件数が、2015年から10万件を超え、昨年度はほぼ16万件に上ったことを知って愕然とした。どうしたら大人達の暴力から子供達を守ることができるのか？加害者が急増した要因は、貧困、社会的抑圧や重圧のためと考えられるが、虐待防止は社会全体の責任として受け止めねばならないと思う。(島田幹夫)

○虐待の問題は虐待を受ける子供に問題があるわけでは無く、虐待をする大人側に問題があるのは当然である。

自分にも身に覚えがあるが、躰という大義名分があって、ついつい手が出てしまったことがあったかと、今更ながら反省している。

躰という名目があったとしても、虐待に繋がる暴力はあってはならないことであり、そのことを明確にするためにも、親に認められているとする懲戒権は廃止すべきであると思う。懲戒権の存在を知らない親も沢山存在すると思うが、懲戒権廃止を議論する



ことで躰であっても暴力を振るうことは許されないことを認識しなければならない。(ryosa)

○児童虐待の加害者は実は現代グローバル資本主義社会における被害者ではないかと思う。現代は格差社会の被害の連鎖が存在している。この格差構造を問題とすべきと思う。重罰化は問題解決とならない。したがって、例会テーマも、「現代格差社会について」を。(Hiramitsu)

○「子ども(へ)の虐待が増えているのはどうしてか？」というのが今月のテーマだったが、私自身は近辺で「この児は虐待を受けている」という事例を見聞きしたことが無い。物語や映画、ドラマの中で出てきた

事例は幾つか見たことはある。ニュースで報道された最近の事例を3例ほど思い浮かべた。それぞれの経緯や「言い分」があって不幸な事件になってしまったようだ。「どうしてか？」ということになると焦点を絞って解明しないとわからない。

「しつけをするため」と言っている人 ②「イライラして子どもに当たり散らした」という人 ③背景には、親が子どもを育てる域に成長していない(経済的及び文化的貧困)。などの経緯があったようだ。

家に帰ってから考えてみて「どうしてか？」をつかむには膨大な問題の整理が必要であることがわかった。

(アダム・スミス)

○例会中に、子どもの虐待の原因として頭に思い浮かんだのは、戦後の産業構造の変化に伴う核家族化、地域共同体の消滅、そして最近では新自由主義的政策に伴う子育て世代の貧困、地域共同体の代わりの役割を果たしてきた会社、職場共同体の消滅に伴う孤立化などでした。ただ、昔も嫁の虐待、それによる自殺なども多かったわけで決して昔が良かったわけではないと思います。対策としては原因として考えられることの逆のことをすればいいわけです。例えば、血縁にこだわらない家族形態のありかた、どうしたら信頼できる仲間を作ることができるのかなど、非常に難しいことだと思いますが、これを自分は来期のテーマのひとつとして揚げたいと思いました。

(たなか)

○今回のカフェも豊かな語りあいだった。参加者の多様な角度からの意見により、虐待をうむ構造を見事に浮き上がらせた。そして、虐待をしたであろう人を誰も非難しなかった。ただ、「ヒトは暴言・暴力をふるうとどんどんエスカレートしていくことがある」という意見があった。その例えをソ連崩壊後、各地でおきた民族紛争を例にとって話された。そこでフーと浮き上がってきたのは「コルチャック先生」の本だった。(尚)

○今回のテーマ「子どもの虐待」は、活発に議論され、色々な角度から問題の核心に迫ることができたように思われたが、根が深い問題であることも明らかになったのではないかと。メディアに取り上げられる虐待は、ほんの氷山の一角で、多くの人の身近にたくさんあるし、子ども的人格を無視して親や教師など、大人の思いや判断を押し付ける場面にまで検討対象を広げれば、もう日常茶飯に起こっている問題と言っている。こうした子どもに対する大人の支配は、「子どもは未熟で分からないのだから」とか「子どもは躰けられるべき」などの理屈で、子どもが自ら考え理解し選んで答えを見つけ出していく過程を台なしにする。虐待はそんな風潮の先端で起きている現象のようだ。親の子に対するそれのみならず、体罰やブラック校則などや、会社におけるパワハラなども日本人社会に残る非近代性に先ず根っこがあり、さらに昨今の多忙化・貧困化・触れ合いの欠如などの時代状況がそれをより悪化させているように思われる。

(フィリピン・ウオッチャー)

## <世界一周貧乏旅 その5> 「グランドキャニオン」

僕が中学生の時、社会の授業で使う地図帳の教科書がありました。その1ページ目には、世界地図と世界の様々の場所の写真が写った小窓があり、その中にアメリカのグランドキャニオンの写真がありました。茶色い地層の重なりがむき出しになった、横にひたすらまっすぐの渓谷と、その地平線に接する青空という写真がなぜだかやけに惹きつけられました。ただ、それは自分には関係のない場所だとも思いました。一生行くはずがないよ、そう思っていました。

2015年4月、25歳の僕は、地図帳の小窓にあった写真と同じ場所に立っていました。アジアから22カ国を地球西回りで1年、最後の最後にアメリカへやってきました。長旅で服は着すぎてよれよれ、靴には穴が空いているなんて出で立ちで、フィナーレというよりただただ限界という有り様でした。



目の前のとんでもなく広大な渓谷はまさに地図帳で見た通りの光景で、茶色い地層がミルフィーユのように重なり、てっぺんの青空との境界線はひたすらまっすぐ横に伸びて、まるで巨大なテーブルのように見えました。自然がただ自然にこの景色を作り出したと思うと、手を合わせて拝みたくなるような畏怖すら覚える気持ちになりました。

中学生のころからの行きたかった場所であり、旅の集大成でもあるこの場所へ来たら、さぞ感動するのだろうなと思っていましたが、案外そうでもなく、おかしな感情かもしれないのですが、ただ安心したのです。なんだか『じっくり』くるような、納得するような、ずっと足りなかったものが埋まったような気がしました。『もう、こ

れから大丈夫だと思った』と旅当時の日記には書いてあり、旅を終えた後の未来にぼんやりながら希望が湧いていました。

旅を終えて、なんだか素朴に、想像の外にあることは想像できないな、と思いました。『人生何が起こるかわからない』というのがなぜ予測できないかという、その起こり得ることが人間の想像力の外側に位置しているからのようで、『私の想像の外側』は、その人には考えようもないことなのです。

中学生の僕はまさか自分が、グランドキャニオンの崖っぶちでちょっと眩しそうに手を広げて立っているなんて、まるで考えもしていませんでした。人生というのは、本当になにが起こるかわからないようです。

(カモノハシタニ)

2019年(令和元年)11月28日 木曜日 岐阜新聞

児童虐待はなぜ起こるのかについて対話する参加者  
=岐阜市八代、仕事工房ポポロ



## 家族形態、社会構造変化に焦点

元岐阜大教授の吉田千秋さんが主宰する「哲学カフェdeぎふ」が岐阜市八代の仕事工房ポポロ内のふれあいスペースで開かれ、「児童虐待はなぜ起こるのか」について市民らが意見を交わした。

カフェは2008年から始まり、137回目。月1回、テーマを設けて意見交換している。

最初に吉田さんが新聞記事などで例を挙げながら児童虐待の現状などを説明し「なぜ、親が子どもを虐待してしまつたのか。親だけの責任と考えず、背景には社

# 児童虐待、なぜ起こる？

岐阜市「哲学カフェ」で議論

会の在り方も関係しているのではないかとこの視点で考えてほしい」と提案した。

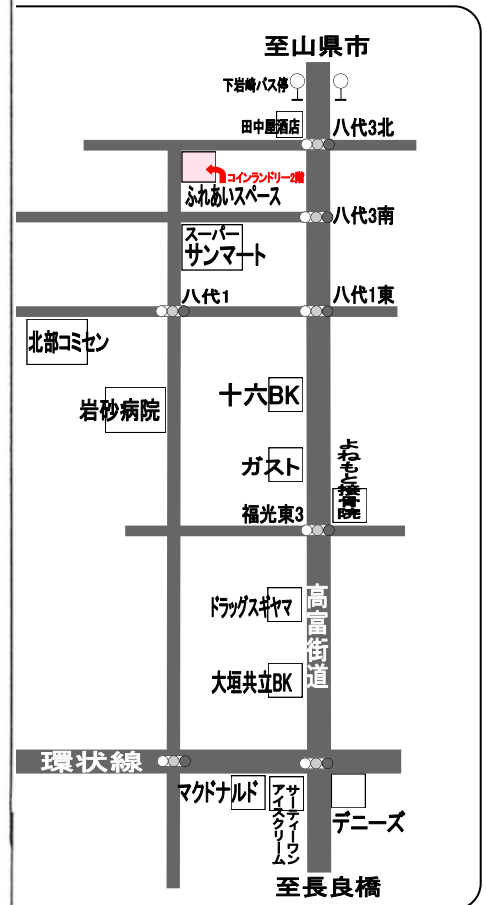
参加者からは「親が言葉で伝える能力が足りないために、手を出してしまうのではないか」「しつけや体罰を厳しく受けた人は、それを自分もしなければと思ってしまうこともある。親の過去に原因があるケースがあるのでは」との意見が出た。「虐待は連鎖している」と、体験をどう乗り越えられるかが重要」「家族形態や社会構造の変化も影響を与えている」といった発言もあった。

次回は12月12日に同所で「日本の男女平等はどうして進まないのか」をテーマに意見交換する。問い合わせは吉田さん、携帯電話090(79)17(9)6602。

(YAMAHANA)

## 例会会場案内

例会への事前申し込みは不要です



2019年後半 **哲学カフェ、第23期の予定**

場所 岐阜市八代3丁目27-8「ふれあいスペース」

**例会は19:00～21:00です。**

第134回例会 8月8日(木)	「参議院選挙の結果から何を学んだのか？」 * 7月21日の参議院選挙の結果、自公政権与党は過半数を得た。だが、最大の焦点だ の2は維持できなかった。この選挙から私たちは何を学んだのか。	終了 しました
第135回例会 9月12日(木)	「老人も若者も信頼できる年金制度とは？」 * 「100年安心」と言われた現行の年金制度は維持が危ない。年金でしか生活できな 将来に不安を抱える若者たち。両者が信頼できる仕組みは可能か	終了 しました
第136回例会 10月10日(木)	「東京五輪は一体何のため、誰のためのものか？」 * もともとウソで始まった東京オリンピック。「節約に努める」との約束も反故にし、一 大、儲けのための、巨額投資。一体何のため、誰のためのものなのか	終了 しました
第137回例会 11月14日(木)	「子どもの虐待が増えているのはどうしてか？」 * 最近子どもの虐待が増えている。どうしてこんなことになったのか。障がい者への につながる人権軽視の大きな流れの一端なのか。真剣に考えてみたい。	終了 しました
第138回例会 12月12日(木)	「日本の男女平等はどうして進まないのか？」 * 参議院選挙で女性の当選者は18名で過去最高タイ。でも、世界ランク130位。 2018年調査で、 総合指数で世界110位。どうしてこんなに進まないのだろう。	

**2020年1月**  
**第139回例会予告**  
**1月9日(木)**  
**18:30～**

「激動の世界、新年の展望を語る」(＝新年会も)

- \* 昨年に続いて、今年も激動する世界・日本、これにどう向き合うのか。
- \* 平穏無事に行きそうもない中、飲食物を持ちより、真剣かつ楽しく語り合う場に。  
⇒開始時間を6:30にします。酒類はなし。よろしく参集願います。

哲学カフェの運営資金の協力 も、よろしく願います。口座記号・口座番号 00810 1 142912

加入者名 哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫

「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中!! <http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/>  
または「哲学カフェ岐阜」で検索わいわいがやがや  
アラカルト

- ★ローマ教皇フランシスコが来日し、核兵器・原発について、じつに明快なメッセージを伝えてくれました。長崎の原爆投下地点での教皇の話はずっと観ていましたが、教皇は穏やかに、心を込めて話していました。大変好感を持ちました。
- ★広島でも「戦争への原子力使用は犯罪以外の何ものでもない」と述べて、核廃絶の訴えを強く訴えました。さらに、原発について、日本を離れる機中で、「原子力利用は完全な安全性を確保するに至っていない」と批判しました。
- ★キリスト教徒でなくとも多くの方は、なるほどとうなずいたであろう。だが、安倍首相はどうであろう。「核兵器保有国の立場も考えて」教皇の考えに反対し、核兵器禁止反対署名を拒絶し、原発は再稼働を進め、軍拡競争の先頭に立っています。
- ★この「歴代最長首相」は、「他に適当な人がいないから」ということで、長年「一強政治」を続けてきた。その驕りによる「政治の私物化」は、どうやら「桜を観る会」問題で自壊し、終焉を迎えつつあるようです。
- ★とはいえ、それは自動的に起こるわけではありません。教皇は若者に、「言葉と行動が偽りや欺まんであることが少なくないこの時代にあって、まさに必要とされる誠実な者となって下さい」と述べました..もちろん大人も心に刻みつけたいものです。

(吉田千秋)

